



歴史を語る日本人ベテランガイド

今から53年前、当時は珍しい国際結婚でシンガポールに移住した日本人女性がいる。今年で82歳を迎える顔夕子さん、史跡ツアーの現役ベテランガイドだ。夕子さんが来星した1967年は、独立からわずか2年。社会は混沌（こんとん）とし、戦中の日本統治期の記憶も人々の心に色濃く残っていた。このほど、夕子さんの特別講演会が開催された。両国をつなぐ先駆者として、歴史を知ることの大切さを伝え続けている夕子さん。彼女の視点で語られる「昔のシンガポール」に耳を傾けた。



顔夕子さん（左）と特別講演会を主催した中垣幸世さん

◇シンガポール人男性との出会い

38年に鹿児島県始良市で生まれた。持ち前の行動力と芯の強さは若い頃から。20代で「憧れの東京に行く」と貯金を全額下ろし、親に内緒で上京した。東京では電話交換手の仕事をする傍ら、ダンスホールでダンスを指導していた。

ある日、シンガポール人男性と出会う。お互いに言葉は通じないが、夕子さんに毎日のように英語でつぶられたラブレターが届き、心が動かされた。海外への渡航が珍しかった時代、「海外旅行にでも行ってみようかという気持ち」で初来星を果たした。旅客機の客室乗務員は振り袖姿だったという。

シンガポール人男性とその後、結婚。初めにカルチャーショックを受けたのは、夫の実家が大家族だったことだ。義理の父親には本妻が6人、それぞれ8人の子どもがおり、義理兄弟だけで48人という大所帯だった。

期待に満ちた新婚生活にもかかわらず、「義理兄弟から自分だけ居場所が与えられない。朝・昼ご飯も分けてもらえない」という辛い時期をすごした。そんな時、「嫌がらせを受けるのは日本人だからなのか」という疑問がふと頭をよぎる。日本は一体何をしたのか。来星するまで、この国の歴史は全く知らなかった。日本人として知らなくてはならない過去があるという強い思いに駆られた。

◇ツアーガイドに

「家に居たら、栄養失調になり倒れてしまう」と、仕事を探した。たどり着いた就職先は、日本人が経営する旅行会社。当時の月給は150シンガポールドル（当時のレートは1ドル＝約120円）。経営者は、中国名を名乗って事業する旧日本軍の脱走兵だった。

戦後、シンガポールには捕虜収容所からジャングルに逃げた脱走兵がかなりいたという。「日本人としては生きづらい時代。皆、中国語もマレー語も堪能だった」と振り返る。元脱走兵たちは朝から旅行会社に集まっては酒を飲み、昔の苦労話を繰り返した。

歴史を学びたくて仕方がなかった夕子さんにとって、元脱走兵らの集まりは戦時期の出来事を学ぶ貴重な機会となった。

旧日本軍はシンガポールで「華僑粛清」という無残な大虐殺を行った。講演会を主催した中垣幸世さんによると、犠牲者は日本政府の発表は5000人だが、シンガポール政府の発表では5万人と旧フォード工場に展示されている。両政府の主張に違いはあるものの、多くのシンガポール住民が漠然としたスパイ容疑などで殺害された事実には変わりはない。



日本人墓地公園にある「からゆきさん」の墓

夕子さんはガイドとして、日本人にさまざまなシンガポールの史跡を案内してきた。「マレーの虎」の異名をとった山下奉文中将がパーシバル英司令官に「イエスカノーか」と降伏を迫ったとされる旧フォード工場、日本占領前と占領中に多くの抗日運動を指揮しシンガポールの英雄とされているリム・ボーセン少将を祭った記念碑など。ツアーの醍醐味（だいごみ）は、夕子さんがこれまでに会ってきた大勢の戦争体験者の話を聞かせてくれることだろう。

夕子さんは「からゆきさん」と呼ばれた高齢女性とも出会っている。明治期以降に日本国外で娼婦として働いた日本人女性のことだ。夕子さんが出会った方は、九州弁を話す気の強い女性だったという。シンガポール日本人墓地公園には、祖国に帰れなかったからゆきさんたちの墓が今でもひっそり並んでいる。

◇元日本兵を案内

旅行会社で働き始めた60年代、「慰霊の旅」として訪れる元日本兵の団体顧客が増えていた。当時は、ジャングルやゴム園など戦時中の面影が残っていたため、戦友が死んだという場所を巡り、シンガポールを案内した。

夕子さんは「『戦友を抱きしめていてください』と言って、地に深々と頭を下げるおじいちゃんたちの姿を忘れることができない」と振り返る。戦後75年、シンガポールは世界有数の近代都市へと成長。当時の面影はすっかり姿を消し、当時のことを語り継ぐ人も減った。

シンガポールでは若い世代に第2次世界大戦の歴史を語り継ごうと、旧日本軍によってシンガポールが陥落させられた2月15日に合わせ、期間限定の戦跡ツアーが毎年開催されている。

規模は年々拡大しており、今年2月に行われたツアーでは、非公開だった旧日本海軍の基地や地下壕などが初めて公開された。主催する国家文化遺産保護局（NHB）のアルビン・タン副局長は取材に対し、両国は戦後、強い協力関係から互いに恩恵を受けてきたと強調した上で、「戦争の悲劇を繰り返さないため」歴史を紹介していきたいと話した。

◇「知らない」では済まされない

講演会を主催した中垣さんは、「シンガポールのことは日本の歴史授業で触れられない。教わっていないから知らないでは済まされない。この国で仕事や生活する以上、日本がこの国で行ったことについて知ってください」と開催の意図に力を込める。

在住日本人が増え、日本に好意を持つ地元民も増える一方、親日的な評判の上にあぐらをかいているのではという問題意識を、昔を経験してきた日本人は少なからず抱いているに違いない。中垣さんも72年、親の転勤で来星した昔を知る先駆者の一人だ。

夕子さんが案内するツアーは、日本人会主催で毎年開催されている。この仕事が好きだと言う夕子さんは「（人生は）まだまだこれから。杖をついてでもガイドを続けたい」と笑顔を見せた。（シンガポール支局 佐藤 淳）